

一般社団法人出羽三山羽黒山伏会  
出羽三山信仰事業

# 湯殿山系即身仏探訪

時は万緑、月山登拝や湯殿山へのご参拝に出向くにも絶好の頃合いでございます。

ご遠方より羽黒山伏会定例行事にご出席の会員の皆様の予定日数が許すまで、出羽三山の大自然の息吹と修験の世界をご満喫頂ければ幸いです。

当法人出羽三山羽黒山伏会は、会員の皆様の出羽三山信仰への御力をさらに強め、深め、広め、厚めにする羽黒修験研修会の実践の場として、本年度は次の事業を実施することに致しました。

羽黒修験研修会⇒出羽三山信仰事業「湯殿山系即身仏探訪」でございます。

貸し切りマイクロバス代と御昼食代(山伏弁当てまり)、御参拝料を込みまして、5,000円位の旅費にて開催できる準備をしていますが、参加人数の状況により若干の割増し旅費になる場合もございます。この点、ご承知頂ければと存じます。

是非にとも、会員の皆様の積極的なご参加をお待ち申し上げます。

お申し込み手続きは何かとの準備の都合上、ご案内の返信はがきをご利用の上に本部事務局までご連絡をお願い致します。

今後、当法人は、多様な出羽三山信仰事業を計画し、開催をいたして参ります。

当事業に対し、何かとのご提言がございましたら、ご遠慮なく本部事務局までご連絡を頂戴できればと存じます。

よろしく願いをいたします。

## 平成〇〇年度 羽黒修験研修会 出羽三山信仰事業「湯殿山系即身仏探訪」

日時 平成〇〇年〇〇月〇〇日(〇曜日) 午前9時30分~午後5時30分頃

場所 羽黒山頂駐車場

旅程 羽黒山頂発→総奥の院湯殿山本宮参拝→湯殿山総本寺大日坊金剛院瀧水寺(代受苦菩薩真如海上人)参詣→湯殿山注連寺(即身仏鉄門海上人)参詣→本明寺(即身仏本明海上人)参詣→鶴岡バスターミナル着(予定)

旅費 5,000円程度の旅費(拝観料・貸切マイクロバス・山伏弁当・お茶込)を予定。  
参加人数の都合により、若干の割増し旅費になる場合もございます。

探訪の狙い

出羽三山の特異な信仰、すなわち即身仏信仰だ。

全国14体現存中、山形県に8体、その内6体が庄内地方に安置されている。

見聞し、湯殿山信仰の原点を考察したい。

## 出発セレモニー 平成〇〇年〇〇月〇〇日 午前9時00分

- ・参加者確認
- ・会長挨拶
- ・行程説明

羽黒山頂出発 9:30→湯殿山本宮正式参拝・玉串奉奠 10:30→  
大日坊真如海上人 12:00→注連寺鉄門海上人 13:00→  
本明寺本明海上人 14:00→南岳寺鉄竜海上人 15:30→  
鶴岡バスターミナル 16:00→羽黒山頂着 17:00

# 湯殿山信仰の源流をたどる

## 湯殿山系即身仏

即身仏とは、密教では即身成仏、すなわち修行して肉身のままで大日如来と一致する仏になること。

この即身仏が数多く出現した山は、全国でも湯殿山の他にはないと言われている。日本に現存する二十四体の即身仏のうち、日本海に面し出羽丘陵に囲まれた山形県の庄内地方に六体、そのうち三体が旧朝日村にある。それらは出羽三山山中の湯殿山大権現に帰依し、表口別当二カ寺、すなわち東田川郡朝日村の真言宗注連寺と大日坊のうちいずれかに所属して、自ら土中に籠って入定したと伝えられる行者の遺骸である。湯殿山系の即身仏は、他にも同じ山形県内陸の米沢市郊外に一体、西置賜郡白鷹町に一体、隣県の新潟県に二体、合わせて十体を数える。これは日本に現存する二十四体の即身仏の約半分近くを占めるわけで、きわめて特異であった湯殿山の信仰のありようを如実に物語るものであろう。

## 生身の肉体で仏になる

江戸時代後期以降、湯殿山の一世人の中には、即身仏となる人が多く現われた。湯殿山開基の弘法大師が高野山の奥の院で入定し、即身仏になったと信じられ、多くの行人達が大師の徳を慕い、即身仏となることを志したのである。

真言密教では、人間が大日如来の力により、生身の肉体のまま仏になることができる」と説いている。つまり即身仏になることは、生前から修行を積み重ね、自らの罪を除くと共に、飢餓や悪病に苦しむ衆生を救う為に一身を捧げること自らの意思により選びとる道であった。

## 三体もの即身仏が残る旧朝日村

即身仏を志した一世人は修行に入り、米・麦・粟、キビ・大豆を断つ「五穀断ち」を行う。その後さらに「十穀断ち」へと進む。先の五穀に加え、蕎麦・麦・ヒエ・小豆・とうもろこし・芋などの栽培された食べ物を断ち、木の実や山野草のみを食する。

これらを千日以上続けると、体の脂肪分はすっかり抜け、死んだ後の肉体が腐敗しにくくなるという。更に腐敗を防ぐために、入定前には漆などを毎日少量飲んだともいわれる。

こうして、最後には断食をし、体中のものを一切排除し、生きたまま土中室に入定する。行人が死んでから三年三カ月後、遺言に従い塚を掘り即身仏として祀られた。

先述のとおり、旧朝日村には現在三体の即身仏が鎮座している。大日坊の真如海上人、注連寺の鉄門海上人、そして本明寺の本明海上人だ。これらの即身仏は、人の世の苦しき、悲しみ、恐れを背負い、いつもここで見守ってきた。

生と死を超えた、上人たちの「祈り」の姿は、現代を生きる私たちにも大切なメッセージを伝えているに違いない。

## 湯殿山系即身仏の縁起書をもとにした入定順(□は今回の探訪先)

### 本明海上人 注連寺系

東田川郡朝日村東岩本の本明寺 天和三年(1683)五月八日・六十一歳

全海上人 大日坊系

新潟県東蒲原郡鹿瀬町菱潟の観音寺 貞享四年(1687)一月八日・八十五歳

忠海上人 注連寺系

酒田市日吉町の海向寺 宝暦五年(1755)二月二十一日・五十八歳

### 真如海上人 大日坊系

東田川郡朝日村大網の大日坊 天明三年(1783)八月十四日・九十六歳

円明海上人 注連寺系

酒田市日吉町の海向寺 文政五年(1822)五月八日・五十五歳

### 鉄門海上人 注連寺系

東田川郡朝日村七五三掛の注連寺 文政十二年(1829)十二月八日・六十二歳

光明海上人 大日坊系

西置賜郡白鷹町鮎貝の蔵高院 嘉永七年(1854)一月二十四日・五十~七十歳

明海上人 大日坊系

米沢市大字築沢松本家の即仏堂 文久三年(1863)三月五日・四十四歳

### 鉄竜海上人 注連寺系

鶴岡市砂田町の南岳寺 明治十四年(1881)十月二十八日・六十二歳

仏海上人 注連寺系

新潟県村上市肴町の観音寺 明治三十六年(1903)三月二十日・七十七歳

八の日の入定が多いが、これはその日がちょうど湯殿山の縁日に当たっており、縁起としてはこの上ない忌日なのである。この他にも、大日坊にもう二体の即身仏があったが、明治八年(1875)の火災で失われた。一体は月光海上人と伝えられているが、あとの一体は不明で、名前とともに焼失してしまった。注連寺でも明治二十一年(1888)の火災で峯海上人の即身仏を失っている。

**本明海上人**は、1623年(元和九年)、武士として生まれ、俗名を富樫吉兵衛と言い、藩主酒井忠義公の病氣全快祈願のため、湯殿山に詣でたことが出家のきっかけだった。湯殿山において靈感を受け、行法を終えても下山しなかったため、藩主の怒りに触れ家族は追放、食録も没収となった。三十九歳の時、注連寺で剃髪し、その後も藩主の病氣全快祈願を続けた。その甲斐あって全快した藩主は、吉

兵衛の真意を悟り家族を召し抱え、本明寺の再興にも大いに賛助するに至った。1673年に即身仏になるべく即身仏堂を建立し、10年間の荒行を続け、1683年、61歳で入定し、3年3ヵ月後に信者より即身仏となったことが確かめられた。

**真如海上人**は、進藤仁左衛門という農家の長男として1687年(貞享四年)、旧朝日村越中山に生まれた。家業をよく手伝っていたある日、山から材木を運搬中に三人の子供に頼まれ大そりに乗せたところ一人の子供が大そりの下敷きになり死んでしまったのである。

その子の弔いと、幼少より仏教に親しんでいたこともあり、迷うことなく大日坊に出家し一世行人となった。20代より即身仏を志し70余年の長い間、難行苦行を積み重ね1783年(天明三年)折からの大飢饉に苦しむ衆生を哀れみ仙人沢に籠って木食行を積み96歳で入定した。人心を魅了する静かな心の持ち主だったと言われている。

**鉄門海上人**は、1768年(明和五年)、鶴岡市に生まれ、俗名を砂田鉄といい、井戸を掘り木流の仕事をしていた。25歳で出家し、69世寛能和尚の弟子となり、空海の「海」と「鉄」と合わせ鉄門海となった。その後、湯殿山仙人沢にて幾多の難行苦行に耐え、一心に仏の弟子として、空海の化身のごとく、加茂坂の隧道開削などの公益事業を数多く成し遂げた。

また、江戸に出た時、流行していた眼病を治そうとし、自分の左目を抉り取り、隅田川の竜神に捧げたと言われている。鉄門海上人は弘法大師が62歳で即身仏になったことに因んで、1829年に三千日の修行の末、見事に即身仏になった。愛情豊かな上人であったと言われている。

**鉄竜海上人**は、秋田県仙北郡仙北町堀見内の進藤家に生まれた。南岳寺は当時御行寺と呼ばれ、湯殿山注連寺の末寺として湯殿山行者、信者の修行所、祈祷所であった。時の住職天竜海上人の室に入り得度し、御行寺や注連寺に於いて修行し、岩手県盛岡市蓮正寺へ普住したのであるが、嘉永年間に御行寺が焼失したことから再び戻り、御行寺の再建に奮闘したのである。また後の師である鉄門海上人が発願した加茂坂隧道開削の工事に際しては、鉄竜海上人が責任者となり、難工事を無事に完成させたと伝えられている。全国各地を巡錫し衆生済度に勤め55歳に至り、宗祖弘法大師の「入定留身して後の世の人々を済度せん」との誓願のもとに大願を発し湯殿山仙人沢に山籠し、寒暑一枚の白衣に身をつつみ、一千日の五穀、十穀断ちの木食行を、また災厄消除等の修行を重ね、ついに胎蔵界大日如来の加護のもとに大願を成就し即身仏となられ、62歳にて明治元年八月八日に入寂された。

南岳寺が昭和31年に窮運に遭って堂舎ごとく灰燼と化したのであるが、不思議にもご本尊と共に即身仏鉄竜海上人の結跏趺坐の姿にて難苦の行の実証を示す尊像は安泰であったことから、これはまことに奇譚と云わねばならない。